

加入国際学術団体に関する調査票

1 国際学術団体活動状況（内規第 11 条 活動報告）

団体名	和	国際生理科学連合
	英	International Union of Physiological Sciences (略称 IUPS)
	団体 HP (URL)	http://www.iups.org/ (日本学術会議が加盟していることの記載 <input checked="" type="checkbox"/> 有 ・ 無)
国際学術団体における最近のトピック (学術の進歩、当該団体の推進体制の変化、国際機関・政府・社会との関わり方等)	<p>IUPS が対象とする「生理科学 (Physiology)」は、生命のしくみと生体機能のメカニズムを解き、さらにその破綻による疾患の成り立ちを明らかにすることを目指す学術分野である。Alfred Nobel 氏が遺書に Noble prize be awarded for “physiology or medicine” と記した通り、生理科学研究の成果は、生命科学の基礎学術としての重要性とともに、様々な疾患の根底にある病態メカニズムの解明とそれに基づく創薬や新しい治療法の開発に寄与しうるものであり、社会的にも極めて重要な価値を創造する。</p> <p>IUPS は、1953 年に設立された、国際学術交流を目的とする非政府的かつ非営利的団体であり「生理科学の研究および教育の世界的振興を進めるとともに、医学や地球規模の健康問題との関りを有する生理科学の、不可欠な学際的学術分野としての重要性を発信すること」をそのミッションとする。IUPS の対応する学術分野は、ヒトの脳の機能解明に迫る神経科学をはじめ、呼吸・循環・内分泌等の医学の諸分野に加え、薬理学、栄養学などの関連諸分野や、生物物理学、医用工学、体力科学、宇宙生理学などの学際領域を広く包括する。IUPS は、生理科学領域における唯一の国際学術団体であり、世界の 60 以上の国・地域の科学アカデミーや生理科学学会などが加盟している。重要な学術活動の一つとして、世界大会 (IUPS コンgress) を 4 年に 1 回開催している。</p> <p>第 39 回 IUPS コンgress (北京、中国) は、COVID-19 の感染拡大の影響により 2021 年 8 月から 2022 年 5 月に延期され ”Marvels of Life - Integration and Translation” をテーマにオンライン開催された。世界の生理科学研究を牽引する研究者が集い、学術プログラムのテーマとして多臓器間の機能連関の研究、定量生物学的理解を目指すフィジオーム研究、医療・創薬への応用研究、新しい方法論による生理科学の進展などを取り上げ、活発で質の高い学術交流が行われた。</p> <p>現在、第 40 回 IUPS コンgress (2025 年 9 月 11 日-14 日、ドイツ、フランクフルト) の開催に向けて準備が進められている。IUPS Council 等をメンバーとする国際プログラム委員会が組織され、日本からは、岡村委員と久保委員が参画している。</p> <p>IUPS では、2022 年に President に就任した Susan Wray 氏のリーダーシップの下に下記の活動を進めている。また、久</p>	

保委員が、2nd Vice President として、その推進に役割を果たしている。

(1) Academy of Physiology : IUPS では、2021 年以来、生理科学分野で功績のあった研究者を、Honorary Fellow、および Fellow of IUPS Academy として顕彰している。日本からは、Fellow of IUPS Academy として、2021 年に、野間昭典氏 (心臓生理学) と宮下保司氏 (神経生理学) の 2 名が選出された (2022 年度に報告済み) のに続き、2022 年には、大森治紀氏 (神経生理学) と高橋智幸氏 (神経生理学) の 2 名が、2023 年には、金子章道氏 (神経生理学)、河西春郎氏 (神経生理学)、御子柴克彦氏 (神経生理学) の 3 名が、2024 年には、狩野方伸氏 (神経生理学)、大橋 俊夫氏 (循環生理学)、岡田泰伸氏 (細胞生理学)、篠田義一氏 (神経生理学)、柳沢正史氏 (睡眠生理学) の 5 名が選出された。

(2) Julie Chan Prize : Julie Chan 氏 (前 IUPS 理事長) の名前を冠した Prize で、international mentoring and/or career development に多大な貢献のあった方を顕彰するものである。2023 年に開始され、毎年 1 名 を選出している。

(3) Early-Stage Faculty Prizes : 若手の生理学研究者を対象として research, education, service to disciplines における優れた貢献に対して顕彰する。2023 年に開始され、毎年 4 名以内を選出している。

(4) 国際的 Mentoring プログラム : 2023 年に開始されたプログラムで、若手研究者・中堅研究者の間を国際的にとりもち、種々の相談や指導を受ける機会を与えるものである。若手生理科学者の育成とともに研究者同士の国際交流と情報共有という側面も含む。特に、Mentee として、特にアフリカ地区、東南・東アジア地区を対象としており、アジア地区の活動は久保委員が担当している。

(5) 東アフリカ生理学会 (EASPS) コングレスの支援 : IUPS は Global な生理科学の振興をミッションとしており、生理学の発展途上にある国々における生理学の教育・研究を後押ししている。その一環として、2023 年 11 月 29 日-12 月 1 日に開催された第 1 回東アフリカ生理学会 (EASPS) コングレスの開催の支援を行った。

(6) IUPS 2024 Beacon Meeting : 2024 年より、新たに重要かつタイムリーと考えられるテーマを設定して Beacon (狼煙) Meeting を実施することとした。初回の 2024 年は、"Rhythmic activity and its disorders in muscle and brain" というテーマを掲げ、10 月 25-28 日に、Tutzing (ドイツ) にて開催された。

<https://www.iups.org/activities/visual-composer-3797/>

(7) Physiome プロジェクト : フィジオーム分野の振興に向け学術雑誌 Physiome の出版を行っている。

(8) Teaching ワークショップ : 生理学の教育に関するワーク

	<p>ショップをオンラインまたはハイブリッドで開催し、生理学教育を担う人材の育成に貢献している。</p> <p>(9) IUPS では、Congress の際に、Delegates (代議員) の代表である Board of General Assembly が中心となって、生理学の現況を分析し展望を発信するための冊子を出版している。IUPS2025 Congress においても”Physiology in a Changing World: Adapting and Transforming” をテーマとして掲げた冊子を出版すべく準備を進めている。</p>
<p>当該国際学術団体が対応する分野において学術の進歩に貢献した事例</p>	<p>ポストゲノムの時代と称され久しいが、その流れの中にあつて、要素の同定にとどまらず、機能の成り立ちの包括的理解を目指す生理科学はその重要性を増している。その端的な例として、ノーベル賞を受賞した多数の研究の中から厳選して記すと、古くは、膜興奮性の原理の解明 (1963 年)、大脳視覚野の情報処理機構の解明 (1981 年)、単一イオンチャネルの活動の解析法の開発 (1991 年)、水やイオンの膜透過機構の分子基盤の解明 (2003 年) 等が挙げられる。近年では、脳内の空間認知機構の解明 (2014 年)、オートファジーの仕組みの解明 (2016 年、大隅良典氏)、概日リズムの分子機構の解明 (2017 年)、細胞による酸素感知の機序の解明 (2019 年)、温感と触覚の受容体の発見 (2021 年) 等、分子・細胞から個体レベルまでの様々な機能メカニズムに関する生理科学研究の成果は枚挙にいとまがない。これらの研究でノーベル生理学医学賞を受賞した Peter C Agre、Stefan W. Hell、Erwin Neher、David Julius、Brian K Kobilka、Ardem Patapoutian、Peter Ratcliffe (敬称略) らは IUPS の Honorary fellows である。</p> <p>これらの研究の例にみられるように、機能を担う生体要素の同定にとどまらず、各生体要素の連関や調節機能により初めて可能となる生体機能の成り立ちを、分子レベルから個体レベルまで包括的に理解することを目指す生理科学の重要性は今後も変わることはなく、この分野の国際学術交流を推進する IUPS の存在意義は大きい。</p> <p>生理学の研究において、生命現象や人体機能を司るメカニズムを解明し、数理モデル化することで定量的に理解し、予測に繋げることは重要である。近年の生体情報の計測技術および計算科学の進歩を基盤とした、生命現象や人体機能のメカニズムの定量的理解とシミュレーターの構築を目指すフィジオーム研究は、生理科学における重要な課題のひとつである。IUPS では、従来からある研究分野ごとの委員会 (Commission) に加えて、Physiome Committee を特別委員会として走らせている。その活動の一つとして、当時の 2nd Vice President の Peter Hunter 氏 (NZ) らが中心となって、オープンアクセスの学術雑誌 “Physiome” を 2020 年 9 月に立ち上げた。これは、今後のフィジオーム研究の発展に大きく貢献しうるものである。合わせて、2003 年より学術雑誌 “Physiology” をアメリカ生理学会と協力して出版している。優れた総説等を掲載することにより、生理科学のさらなる発</p>

	<p>展のためのプラットフォームとしての役割を果たしている。</p> <p>IUPS は、4年に一度開催するコンGRESの国際プログラム委員会において、その時々のホットトピックスや技術革新により開かれた新分野や、ユニークなテーマ、時代を超えた重要テーマについて徹底した議論を行い、一流の生理科学者による優れたレクチャーやシンポジウムを企画・実施してきた。IUPS2009（京都）において、ノーベル賞受賞者によるレクチャー等を多数実施した。IUPS2022（北京）においても、大隅良典氏がプレナリーレクチャーを行った。IUPSは、IUPS2022（2022年5月、北京）に始まり2023年3月開催の日本生理学会第100回大会までの1年間を”Year of Physiology”として、世界の生理科学研究の推進を図り、日本生理学会第100回大会においては、2022年にノーベル賞を受賞した Svante Paabo氏が Plenary Lecture を行い、人類の進化と生理学の接点を探った。また2012年にノーベル賞を受賞した山中伸弥氏が Plenary Lecture をおこない iPS 細胞の発見から生理学および臨床応用までの発展について講演した。IUPS2025（フランクフルト）においても、河西春郎氏、月田早智子氏が、Special Lecturer に選出された。</p> <p>IUPS は、これらのプログラムを通して、世界中の生理科学研究者に対し、最先端の研究成果に関する情報を与えるのみならず、肌感を持って体感していただく機会を提供している。また、シンポジウムの実施により、専門を同じくする研究者間の共同研究等の展開につながる研究交流の場を提供している。これらは、新たなブレークスルーとなる研究を生み出すインスピレーションを与える機会となるとともに、種々の教育関連プログラムとともに次世代の生理科学研究者の育成に貢献するものである。</p>
<p>政策提言や世界の潮流になりそうな研究テーマ・研究方式・研究助成方式等</p>	<p>新たな理論による顕微鏡技術の進歩とAIを用いた画像解析技術の進歩を背景に、単一分子レベルから個体レベルまで、機能と構造を多階層にシームレスに融合して生命現象を解明する研究、形態と分子動態生体をシステムとして捉えた包括的機能関連研究、機能とシミュレーションから生理機能を理解するフィジオーム研究および生体・疾患シミュレーターの構築、ヒトを含めた全ての生物と地球環境の健全を一体として捉えて実現する「ワンヘルス」の学理の構築、脳の全回路を明らかにするコネクトーム研究などが挙げられる。また、2024年のノーベル物理学賞を受賞したタンパク質の構造予測と人工タンパク質の作成等の A.I.を活用した新規方法論による分子細胞生理学等の研究の推進は、今後、益々重要になると考えられる。国際間の共同研究やデータベースの共有など国際連携が推進されている。これらの研究は、政策提言に重要な科学的根拠を提供する。</p>
<p>日本人役員によるイニ</p>	<p>日本は1953年のIUPS設立時の設立国のひとつである。これまでに、金子章道氏がIUPS会長を務めるなど、日本人役員</p>

<p>シアティブ事項や日本の参加によって進展や成果があった事例</p>	<p>は IUPS の運営において重要な役割を果たしてきた。さらに、IUPS コンgressを、東京（1965 年）と京都（2009 年）にて成功裡に開催した。また、日本は、加盟国の中で第 3 位の分担金額を負担し、IUPS の運営において指導的な立場が維持されている。</p> <p>2022 年の IUPS 北京大会の総会において、久保委員が 2nd Vice President に、岡村委員が Council および Commission 6 “Molecular and Cellular Physiology” の Chair に選出された。久保委員と岡村委員は、2025 年 IUPS フランクフルト大会の国際プログラム委員会の委員に選出され、オンライン会議に出席し、プログラムの策定等に当たっている。</p> <p>久保委員は、執行部メンバーとして、2 か月に 1 回程度のオンライン会議に出席し、特に、新しい Awards の策定と選考、アジア地区における国際メンタリングプログラムの策定、Board of General Assembly の活動との擦り合わせ等に貢献している。</p> <p>さらに IUPS の傘下に位置するアジア・オセアニア生理学会連合（FAOPS）の設立に、伊藤正男氏（元日本学術会議会長）が中心的役割を果たした。その後、会長や副会長などが日本から選出された。近年は、久保委員が、2019 年-2023 年に Secretary General を務め、2023 年-2027 年は Council として参画している。</p> <p>第 9 回 FAOPS コンgress（FAOPS2019）は、大会長を鍋倉淳一（元 IUPS 分科会委員、元 機能医科学分科会委員長）が、副大会長を岡村康司、加藤総夫（IUPS 分科会委員）らが務め、第 96 回日本生理学会大会との合同大会として 2019 年 3 月に神戸において開催された。プログラムは、3 名のノーベル賞受賞者（Linda Buck 氏、David Julius 氏、大隅良典氏）のプレナリーレクチャー、9 名の特別講演、80 のシンポジウム、1,100 題を超える一般演題を含み、これまでの FAOPS コンgressの中で最大規模の充実した構成となった。海外参加者は 500 名を、総参加者は 2,000 名を超え、日本の生理科学の力を世界に発信する場となった。</p>
<p>当該団体に加入していることによる日本学術会議、学会、日本国民にとってのメリットや変化</p>	<p>IUPS が対象とする「生理科学（Physiology）」は、生命のしくみと生体機能のメカニズムを解き、さらにその破綻による疾患の成り立ちを明らかにすることを目指す学術分野であり、人体の機能と疾患の解明に多大な貢献をしてきた。これまで、生理科学分野の多岐にわたる基礎研究の成果は医療機器や創薬などに応用・社会実装され、日本国民の健康や生活、そして日本経済に多大な貢献を果たしてきた。IUPS は、世界の 60 以上の国/地域の科学アカデミーや生理科学学会などが加盟する生理科学領域の唯一の国際学術団体である。そのため、IUPS への参加により、生理科学の様々な領域における最新の研究成果を国内研究者へ還元すると共に、IUPS は日本の生理科学領域の成果を世界に発信する重要なルートとなってい</p>

	<p>る。また、日本の若手研究者の海外での活躍・海外の若手研究者の日本への受け入れを促し、国際交流を通じた生理科学の発展に不可欠な役割を果たしている。</p> <p>前述の IUPS2009（京都）ならびに FAOPS2019（神戸）の日本における開催は、学術ばかりでなく、人的な国際交流・国際親善においても、海外参加国/地域および日本において好ましい効果を生み出した。IUPS2009 の開会式に皇太子殿下（当時）にご臨席いただいたことがきっかけとなり、メディアを通じて「生理科学」が国民にとってより親しみのある学問として周知された。また、国内の生理科学研究者にとっては、開催に向けた開催決定後の準備期間を含めて国際学術交流を強化するきっかけとなった。</p> <p>このように、IUPS, FAOPS の活動を通じ世界の生理科学の振興に向けての日本の貢献は明確であり、海外からも高く評価されている。一方で、先進的な生理科学の研究では、欧米がリードしており、また中国の台頭が著しい。よって、日本の生理学を含む生命科学や基礎医学のレベルを高め人材を育成する上で、IUPS や FAOPS への参画は重要な意味を持つ。よって、IUPS, FAOPS への参画は、生理科学の世界的趨勢に関する情報を得ること、日本の生理科学を世界に発信すること、研究者の活発な国際交流を推進すること、次世代を担う大学院生を含む若手生理科学者を育成することに役立っている。そのため、国際連携の推進を重要目標として掲げている日本学術会議、および我が国の生理科学の振興を通じて日本国民の健康と経済に対し、高い費用対効果が見込めると考えられる。</p> <p>以下、2025 年 5 月にいただいた「国際対応戦略立案分科会委員指摘事項」を踏まえて追記する。</p> <p>生理学は様々な生命科学・基礎医学の根幹にあり、その学術活動において、日本生理学会をはじめとして、多くの生命科学、基礎医学の学会が関連を有している。その中で、生理学そのものの全般を対象とする日本生理学会が、日本における生理学の中核的な役割を果たしている。同時に、日本生理学会の理事、会員、IUPS 分科会の委員の多くが、複数の国内関連学会に所属して活動を行っている。生理学会および国内関連学会は、学会間で合同シンポジウムを開催して情報交換を行ったり、合同大会を開催するなど、連携して生理科学関連領域の学術の推進にあたっている。このような多学会が関与する状況を踏まえると、また、今後も、日本が IUPS の運営等に対して積極的に関わっていくためには、IUPS に、国として、すなわち、日本学術会議が、Adhering Body として参画することが強く望まれる。</p>
<p>その他（若手研究者・女性研究者育成法、科学者の倫理に関する当該国際学術団体の基本方針</p>	<p>IUPS はダイバーシティ&インクルージョンに積極的に取り組んでおり、現在の President は女性、執行部 5 名のうち 2 名が女性、理事 16 名のうち 6 名が女性である。また、理事の選出にあたり、研究分野枠等に加え、グローバルな視点から地</p>

<p>や憲章、資金提供ソースの発掘における画期的な方策等の特記事項など)</p>	<p>域的配慮もなされ生理科学の先進国のみならず、地域枠として、アフリカ、アジア・オセアニア、中南米からも選出されている。</p> <p>IUPS は若手研究者の育成にも積極的に取り組んでおり、世界各国の研究・教育の振興を目的としたイベント（中国（2020年）、パキスタン（2021年）、インド（2021年）、タンザニア（2023年）等）の開催に協力した。</p> <p>また、国際 Mentoring プログラムを、特に、アフリカ、東南・東アジアの Mentee を対象として実施している。若手生理科学者の育成とともに、年齢の近い研究者同士の国際交流と情報共有を推進している。</p> <p>FAOPS の活動の一環として、生理科学教育を重視し、Inter-Medical School Physiology Quiz を共催して教育普及に務めることにより、生理科学研究の人材育成に携わっている。直近では 2024 年 7 月にフィリピン・セブ島で開催された。日本でも、Physiology Quiz in Japan と題して、岡山大学（2016年）、大阪医科大学（2017年）、鳥取大学（2018年）、東京医科歯科大学（2021年）、東京慈恵医科大学（2019年、2024年）の学生が主催者となり、海外からの参加者も得て開催された。</p> <p>科学者の倫理に関する基本方針や憲章に関して、IUPS は倫理委員会を設立しており、各国の生理学協会における研究倫理原則の策定を支援してきた。1997年に IUPS の倫理委員会がユネスコにおいて研究倫理に関する会議を企画し「Ethics of Life」（1997, UNESCO）を出版した。2002年に開催された IUPS コンgress（ニュージーランド）では「ヒトと動物に関する生理学研究の倫理原則に関する決議」が採択された。</p> <p>現在まで、IUPS 所属の各国の生理学会において、ヒトを対象とする研究の倫理および動物実験の倫理ならびに代替法についてのシンポジウム等を開催し、議論を続けている。</p> <p>資金提供ソースの発掘に関して、IUPS は、所属する各国の生理学会に対し、生理科学分野の強化を目的とした新たなイニシアチブを支援するために、政府や民間から資金を調達する手段を模索することを推奨している。</p>
--	--

2 今後の予定について（内規第 11 条 活動報告）

<p>総会、理事会の日本開催の予定（招致等の予定も含む）</p>	<p>IUPS コンgress を 2009 年に京都で、FAOPS コンgress を 2019 年に神戸で開催した。将来的な日本開催の誘致について、日本生理学会会員を対象としたアンケート調査により意見を収集している。</p>
<p>日本人の役員立候補等の予定</p>	<p>IUPS2022（北京）での総会において、次期 IUPS 理事および執行部が選出され、2022-2025 年の間、日本からは久保委員が 2nd Vice-President を、岡村委員が Council & Chair of Commission 6 (Molecular and Cellular Physiology) を務めている。</p>

<p>現在、検討中の日本からの提言や推進するプロジェクト等の動き</p>	<p>日本生理学会大会において、日中韓、日中、日韓、日台湾、日豪、日独等の国際連携シンポジウムを開催し、アジア・オセアニア各国との国際連携の基盤強化を図っている。</p> <p>さらに、第 100 回日本生理学会大会（2023 年 3 月）に IUPS President の Susan Wray 氏、および FAOPS President（当時）の Chae-Hun Leem 氏を招聘し、日本生理学会執行部とともに、IUPS の今後の活動方針および IUPS と日本生理学会の連携強化について意見交換を行った。</p> <p>FAOPS コンgress（2023 年 11 月、韓国、大邱）において、Susan Wray 氏と日本生理学会執行部で意見交換を行った。</p>
--------------------------------------	---

3 国際学術団体会議開催状況（内規第 11 条 活動報告）

<p>総会・理事会・各種委員会等の状況 （過去 5 年間及び今後予定されているもの）</p>	<p>総会開催状況</p>	<p>[IUPS 関連]</p> <p>2017 年（開催地：リオデジャネイロ/ブラジル）</p> <p>2022 年（開催地：北京/中国） （COVID-19 感染拡大の影響により 2021 年から延期）</p> <p>2025 年（開催地：フランクフルト/ドイツ）</p> <p>[FAOPS 関連]</p> <p>2019 年（開催地：神戸/日本）</p> <p>2023 年（開催地：大邱/韓国）</p> <p>2027 年（開催地：マレーシア）</p>
	<p>理事会・役員会等開催状況</p>	<p>[IUPS 関連]</p> <p>2017 年（開催地：リオデジャネイロ/ブラジル）</p> <p>2018 年（開催地：ロンドン/英国）</p> <p>2021 年（オンライン開催）</p> <p>2022 年（開催地：北京/中国）</p> <p>2025 年（開催地：フランクフルト/ドイツ）</p> <p>IUPS 執行部の会議はオンラインにて年 6 回程度開催。</p> <p>[FAOPS 関連]</p> <p>2018 年（開催地：高松/日本）</p> <p>2019 年（開催地：神戸/日本）</p> <p>2020 年（オンライン開催）2 回</p> <p>2022 年（オンライン開催）</p> <p>2023 年（開催地：大邱/韓国）、（オンライン開催）1 回</p> <p>2024 年（オンライン開催）3 回</p>
	<p>各種委員会開催状況</p>	<p>[IUPS 関連]</p> <p>2021 年（オンライン開催）国際プログラム委員会 3 回</p> <p>2022 年（開催地：北京/中国）</p> <p>2023 年- 2024 年（オンライン開催）国際プログラム委員会 3 回</p>

	研究集会・会議等開催状況	<p>[IUPS コンgress]</p> <p>2017年（開催地：リオデジャネイロ/ブラジル）</p> <p>2022年（開催地：北京/中国）（2021年から延期）</p> <p>2025年（開催地：フランクフルト/ドイツ）</p> <p>[FAOPS コンgress]</p> <p>2019年（開催地：神戸/日本）</p> <p>2023年（開催地：大邱/韓国）</p> <p>2027年（開催地：マレーシア）</p>																											
上記会議等への日本人の参加・出席状況及び予定	<p>[IUPS 関連]</p> <p>2017年 IUPS2017（日本からの参加登録者 26名、総会代議員 5名、理事会 2名（御子柴、久保））</p> <p>2018年 IUPS 理事会（1名（久保））</p> <p>2021年 IUPS 国際プログラム委員会（2名（御子柴、久保））</p> <p>2022年 IUPS 理事会（2名（久保、岡村））総会（代議員 5名）</p> <p>2023-2024年 IUPS 国際プログラム委員会（2名（久保、岡村））</p> <p>[FAOPS 関連]</p> <p>2018年 FAOPS 理事会（1名（久保））</p> <p>2019年 FAOPS2019（神戸）（日本からの参加登録者 1,500名超、総会代議員 5名、理事会 1名（久保））</p> <p>2023年 FAOPS2023（大邱）（日本からの参加登録者 121名、総会代議員 5名、理事会 1名（久保））</p> <p>以上のように日本学術会議の連携会員が IUPS, FAOPS の中核において活動しており、それに伴い多くの日本人が参画している。</p>																												
国際学術団体における日本人の役員等への就任状況（過去5年）	<table border="1"> <thead> <tr> <th data-bbox="544 1200 711 1261">役職名</th> <th data-bbox="711 1200 927 1261">役職就任期間</th> <th data-bbox="927 1200 1118 1261">氏名</th> <th data-bbox="1118 1200 1409 1261">会員、連携会員の別</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="544 1261 711 1386">IUPS Council member</td> <td data-bbox="711 1261 927 1386">2017～2022</td> <td data-bbox="927 1261 1118 1386">御子柴克彦</td> <td data-bbox="1118 1261 1409 1386">(24・25期) 会員・<u>連携</u></td> </tr> <tr> <td data-bbox="544 1386 711 1512">IUPS Council member</td> <td data-bbox="711 1386 927 1512">2017～2022</td> <td data-bbox="927 1386 1118 1512">久保義弘</td> <td data-bbox="1118 1386 1409 1512">(24・25期) 会員・<u>連携</u></td> </tr> <tr> <td data-bbox="544 1512 711 1637">IUPS 2nd Vice-President</td> <td data-bbox="711 1512 927 1637">2022～2025</td> <td data-bbox="927 1512 1118 1637">久保義弘</td> <td data-bbox="1118 1512 1409 1637">(25・26期) 会員・<u>連携</u></td> </tr> <tr> <td data-bbox="544 1637 711 1816">IUPS Council member</td> <td data-bbox="711 1637 927 1816">2022～2025</td> <td data-bbox="927 1637 1118 1816">岡村康司</td> <td data-bbox="1118 1637 1409 1816">(25期) 会員・<u>連携</u> (26期) <u>会員</u>・連携</td> </tr> <tr> <td data-bbox="544 1816 711 1942">FAOPS Secretary General</td> <td data-bbox="711 1816 927 1942">2019～2023</td> <td data-bbox="927 1816 1118 1942">久保義弘</td> <td data-bbox="1118 1816 1409 1942">(24・25期) 会員・<u>連携</u></td> </tr> <tr> <td data-bbox="544 1942 711 2029">FAOPS Council</td> <td data-bbox="711 1942 927 2029">2023～2027</td> <td data-bbox="927 1942 1118 2029">久保義弘</td> <td data-bbox="1118 1942 1409 2029">(26期) 会員・<u>連携</u></td> </tr> </tbody> </table>	役職名	役職就任期間	氏名	会員、連携会員の別	IUPS Council member	2017～2022	御子柴克彦	(24・25期) 会員・ <u>連携</u>	IUPS Council member	2017～2022	久保義弘	(24・25期) 会員・ <u>連携</u>	IUPS 2nd Vice-President	2022～2025	久保義弘	(25・26期) 会員・ <u>連携</u>	IUPS Council member	2022～2025	岡村康司	(25期) 会員・ <u>連携</u> (26期) <u>会員</u> ・連携	FAOPS Secretary General	2019～2023	久保義弘	(24・25期) 会員・ <u>連携</u>	FAOPS Council	2023～2027	久保義弘	(26期) 会員・ <u>連携</u>
役職名	役職就任期間	氏名	会員、連携会員の別																										
IUPS Council member	2017～2022	御子柴克彦	(24・25期) 会員・ <u>連携</u>																										
IUPS Council member	2017～2022	久保義弘	(24・25期) 会員・ <u>連携</u>																										
IUPS 2nd Vice-President	2022～2025	久保義弘	(25・26期) 会員・ <u>連携</u>																										
IUPS Council member	2022～2025	岡村康司	(25期) 会員・ <u>連携</u> (26期) <u>会員</u> ・連携																										
FAOPS Secretary General	2019～2023	久保義弘	(24・25期) 会員・ <u>連携</u>																										
FAOPS Council	2023～2027	久保義弘	(26期) 会員・ <u>連携</u>																										

出版物	<ol style="list-style-type: none">1 定期的（年6回） 学術雑誌 Physiology https://journals.physiology.org/journal/physiologyonline2 定期的（オープンアクセスとして随時） 学術雑誌 Physiome https://journal.physiomeproject.org/
<p>活動状況が分かる年次報告等があれば添付又は URL を記載</p> <ul style="list-style-type: none">・年次活動報告については、報告書を別添。・諸活動を記載した IUPS ホームページの URL: https://www.iups.org/	

4 国際学術団体に関する基礎的事項（内規第3条、4条、5条）

国内委員会 (内規4条第3号)	委員会名	IUPS 分科会
	委員長名	赤羽 悟美
	当期の活動状況	<p>(開催日時 主な審議事項等)</p> <p>(1) 第1回IUPS分科会を第101回日本生理学会大会会期中(2024年3月29日)に開催し、委員長として赤羽委員、副委員長として久保委員、幹事として岡村委員(日本学術会議会員基礎医学委員会)と中條委員を選出した。今期の活動方針を決定した。</p> <p>(2) 日本学術会議(SCJ)へ加入国際学術団体に関する調査票のupdate版を2024年4月に提出した。</p> <p>(3) 日本学術会議の活動状況等に関する年次報告(2023(令和5)年10月~2024(令和6)年9月)を提出した。</p> <p>(4) 基礎医学委員会分野別委員会活動報告(2024(令和6)年4月~2025(令和7)年3月)を提出した</p> <p>(5) 今年度第2回IUPS分科会を11月~12月頃に開催する予定。</p>
内規第3 (国際学術団体の要件関係)	<p>国際学術交流を目的とする非政府的かつ非営利的団体である</p> <p>① 該当する 2. 該当しない</p> <p>※根拠となる定款・規程等の添付又はURLを記載 (https://www.iups.org/constitution-bylaws/)</p>	
	<p>各国の公的学術機関及び学術研究団体等が国際学術団体に国を代表する資格を有して加入するものが、主たる構成員となっている(主たる構成員が、いわゆる「国家会員」であるか否か)</p> <p>① 該当する 2. 該当しない</p> <p>※根拠となる資料の添付又はURLを記載 (https://www.iups.org/iups/member-societies/)</p>	
	<p>下記の事項(ア~エ)のいずれか一つに該当するか(該当するものに○印)</p> <p>① 個々の学術の専門分野における統一的かつ世界的な組織を有するもの</p> <p>イ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、統一的かつ世界的な組織を有するもの</p> <p>ウ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、ア又はイの国際学術団体を連合した世界的組織を有するもの</p> <p>エ 構成員のうち、各国代表会員がアジア地域等我が国が関係する地域等に限られるものであって、当該国際学術団体の研究の領域が複数の専門分野にわたるもの</p>	

10 カ国を超える各国代表会員が加入している	
① 該当する 2. 該当しない	
加入国数及び主要な各国代表会員を 10 記載	(50 ケ国)
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 各国代表会員名 / 国名 [Adhering Bodies] 14 Adhering bodies / 14 countries Australian Academy of Science / Australia The Royal Academies for Science and the Arts of Belgium / Belgium Royal Danish Academy of Sciences / Denmark Comité Francais des Unions Scientifiques / France Indian National Science Academy / India Science Council of Japan / Japan The Royal Society of New Zealand / New Zealand Norwegian Academy of Science & Letters / Norway Russian Academy of Sciences / Russia National Research Foundation (South Africa) / South Africa [National Physiological Societies] 43 societies / 43 countries

(参考)

国内関係学協会 (主要 10 団体)

日本生理学会、日本病態生理学会、日本神経内分泌学会、日本神経科学学会、日本神経化学会、日本薬理学会、日本生化学会、日本分子生物学会、日本生物物理学会、日本平滑筋学会